



Data

監督・脚本: アレハンドロ・アメナーバル

出演: イーサン・ホーク/エマ・ワトソン/ロテール・ブリュート/デヴィッド・デンシック/ピーター・マクニール/デヴォン・ボスティック/アーロン・アシュモア/デヴィッド・ジュリス/ディル・ディッキー

👁️👁️ みどころ

『アザーズ』(02年)『海を飛ぶ夢』(04年)のアレハンドロ・アメナーバル監督が『アレクサンドリア』(09年)以来6年ぶりに放った本作は、“実話に基づく衝撃のサスペンス”だが、そもそも“リグレーション”って一体ナニ？

本作には“悪魔伝説”が登場し、オカルト的な気味の悪い雰囲気がいっぱいだが、それってホンモノ？それとも、ひょっとして“心理の退行”現象による幻想？

そこらの心理学的理解が難しいこともあって、本作は酷評され、観客もまばらだが、あっと驚く結末には、なるほど、なるほど・・・。

現在、日本の女子体操界は“パワハラ告発”によって塚原光男・千恵子夫妻が危機に陥っているが、そこではひょっとして本作のような可能性も・・・？

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■この監督の最新作は必見！！そう思ったが・・・■□■

『アザーズ』(02年)、『シネマ2』230頁)、『海を飛ぶ夢』(04年)、『シネマ7』197頁)で有名なアレハンドロ・アメナーバル監督が、『アレクサンドリア』(09年)、『シネマ26』130頁)以来6年ぶりに放ったのが、本作。『6才のボクが、大人になるまで。』(14年)、『シネマ35』46頁)で名演技を見せたイーサン・ホークと、『美女と野獣』(17年)、『シネマ40』未掲載)の大ヒットで有名になった美人女優エマ・ワトソンというビッグネームを起用しているから、本作も大ヒット！

そう思っていたが、劇場はガラガラ！チラシには『アザーズ』のアレハンドロ・アメナ

一バル監督が仕掛ける実話に基づく衝撃のサスペンス！！」の文字が躍っているが、そもそも“リグレッション”とは一体ナニ？そこで、英語の辞書を調べると、“regression”とは、①後戻り、②≪心理学≫退行、③≪統計≫回帰、等と解説されている。本作のタイトルとされている“リグレッション”は②の心理学における退行のことらしいが、さらに心理学における“退行”って、一体ナニ・・・？

■□■父親が娘への虐待を告白！しかし、その根拠は・・・？■□■

時代は1990年、舞台はアメリカのミネソタ。雨の中をパトロールするブルース・ケナー刑事（イーサン・ホーク）が登場し、父親の虐待を告発した少女アンジェラ（エマ・ワトソン）の事件を彼が担当するところから物語が始まる。ケナーが調べる被疑者は、何と同じミネソタ署の刑事であるジョン・グレイ（デヴィッド・デンシック）。彼は記憶がないといいつつ、自らの罪を認めてしまうから、アレレ・・・？

取り調べる側としても、どんな行為をしたのかについて、「記憶はないが、罪は認めます」では調書にならないから、ケナーは捜査の手を広げていったが、そこでいつも出てくるのは悪魔伝説の話ばかりだから、バカバカしい。そう考えたケナーは同僚の刑事ジョージ・ネスビット（アロン・アシュモア）とともに、有名な心理学者であるケネス・レイنز教授（デヴィッド・シューリス）の応援を得て、ジョンの心理の中、そしてアンジェラの記憶の中に入っていき、そこで出てくるのも何と悪魔の儀式ばかりだから、いやはや恐ろしい。

そういえば、チラシには薄気味悪いそんな写真があったし、アンジェラのお腹に刻まれているという十字のキズを見せている写真もあったから、なるほど本作はそんな映画・・・。

■□■“意識の退行”現象って一体ナニ？■□■

本作では、虐待で告発された父親ジョンと、告発した娘アンジェラの他、アンジェラの祖母ローズ・グレイ（ディル・ディッキー）が登場する。そして、この気味の悪いいわだらけのおばあさんが、本作では悪魔の儀式の演出において大きな役割を果たすので、それに注目！また、アンジェラの兄ロイ・グレイ（デヴォン・ボスティック）もケナー刑事、ネスビット刑事の訪問を受ける中で、仕方なく事件の解明に協力していく（？）のでそれにも注目！

しかし、本作で何より大きな意味を持つのは、『リグレッション』というタイトル通り、“意識の退行”という難しい人間心理だから、ケナーと同じように心理学者レイنز教授の助言を受けながら観客もそれをしっかり勉強する必要がある。調査を続けていくうちケナーは、長期にわたって本件を調べていたFBIも途中で投げ出したことがわかったが、それは一体何故？そして、捜査を進めれば進むほど、ケナーの周りには悪魔の儀式の幻想が登場し、夜中には脅迫するかのような無言電話がかかってくるようになったが、それ

は一体何故・・・？

■□■若い女の子が嘘をつくはずがない！そりゃ本当？■□■

現在日本の女子体操界では18歳の宮川紗江選手の“パワハラ告発”によって、塚原光男・千恵子夫妻が危機に陥っている。そんな中、私はその問題についてある人が「18歳の女の子が嘘をつくはずがないから・・・」としたり顔でコメントしている姿をTVで観て唾然としたことがある。若い女の子が時としてとんでもない嘘をつくことは、キーラ・ナイトレイとシーアシャ・ローナンが姉妹役で共演した『つぐない』（07年）を観ればすぐにわかる（『シネマ19』306頁）。そこではシーアシャ・ローナン演ずる13歳の妹が先入観によって、ある男を姉の強姦犯だと証言したため、大変な事態になっていった。そう考えると、ひょっとして宮川選手のパワハラ告発にも虚偽があるかもしれない。少しはそんな疑いの目で見ることも必要なのでは・・・？

本作では、アンジェラの言葉をハナから信じ込んだケナーは同僚のジョンをとことん追求しそれなりの成果を挙げていくが、さてそこにはどこまでの真実が・・・。

■□■本作の評価は？アメナーバル監督 頑張れ！■□■

キリスト教社会であるヨーロッパとアメリカでは、キリスト教文化の裏返しとして悪魔伝説があり、悪魔崇拜カルトがある。黒いマントの集団、いけにえの儀式等は日本人の我々もよく知っているが、アンジェラがその体験と被害を訴えるのは一体何故？逆に同じ被害を受けたはずの兄のロイがそれについて口を閉ざすのは一体何故？そこでのキーウーマンが前述の通り二人の祖母であるローズだが、このおばあちゃんは本当に魔女もしくは魔女伝説にいつも参加している常連さん・・・？

前述した通り、心理学でいう“退行現象”とは一体どんなもの？それがわかれば本作は理解しやすいが、多くの観客はその方面的知识がないからどうしても本作はわかりにくい。そのこともあって、ウィキペディアによれば「本作は批評家から酷評されている」と書かれていたから、なるほど、なるほど・・・。そして、観客がわずか数名しかいなかったことについても、なるほど、なるほど・・・。

前述したアメナーバル監督の3作品はいずれも素晴らしい出来だったから、本作の酷評は私には少しさびしい。しかし、今後の彼の立ち直りは・・・？

2018（平成30）年9月25日記